

「第6回 日本女性学習財団 未来大賞」全体講評

今回の受賞作は、厳正な審査の結果、佐伯加寿美さんの「何歳になってもドアは叩け」に決まりました。筆者は、スポーツ大会の運営経験のなかで男女共同参画の必要性を感じ、県主催の男女共同参画関連の講座で自分が「いい妻、いい母」の呪縛から解かれるべきと知り、その後、いくつかの仕事を経て、60歳で市議会議員になった出発・再出発について、歯切れの良い文章で綴っています。そして、選挙活動や議員活動を通じ、それらがいかに男性中心であるかを実感しつつ、しかし、暮らしの現場の声を拾い、人と人をつなぐ活動を通して、女性が政治を担う必要性をレポート内で論じています。

女性の政治参画が求められている時代にふさわしい内容であり、自分もと思う人をエンパワーしてくれるだろうこの作品は、選考委員全員から高い評価を得て、大賞に選ばれました。

なお、公益財団法人 日本女性学習財団は、政治的に中立であること、特定の政党に加担しないことを方針としていますが、この作品は議員になるまでの経緯と議員になって見えてきたことについて、ジェンダー視点で分析し提示したものであり、財団の方針に反しないと認められました。

今回の応募作品は19篇とこれまでに比べ少なかったのですが、多岐にわたるテーマの力作が多くありました。グループによる作品は1篇でした。

今回の応募作には、DV被害者が再起に向けて歩んだ軌跡や、起業の記録、歴史的な観点からの問題意識が評価された作品などがありました。また、ジェンダーについての教育実践の記録や、教員を辞めてからジェンダー視点に気づき、自分の教育活動を反省的に見直すなど、学校教育にかかわる内容も目立ちました。妻の自立を支援する夫、女性の多い職に就いて経験した男性差別などについての作品もありました。

選考のポイントとしては、タイトルの付けかたがほんとうに内容にふさわしいか適切か、独自性があるか、構成に過不足はないか、文章表現が適切か、読みやすさの工夫がされているか、そしてなによりもジェンダー視点が明確かなどの点です。

なかには、さらに研究や考察を深めた内容で再応募を期待したいとされた作品もあります。次回も、本賞の趣旨にかなう作品の応募・再応募をお待ちしております。

「第6回 日本女性学習財団 未来大賞」選考委員会